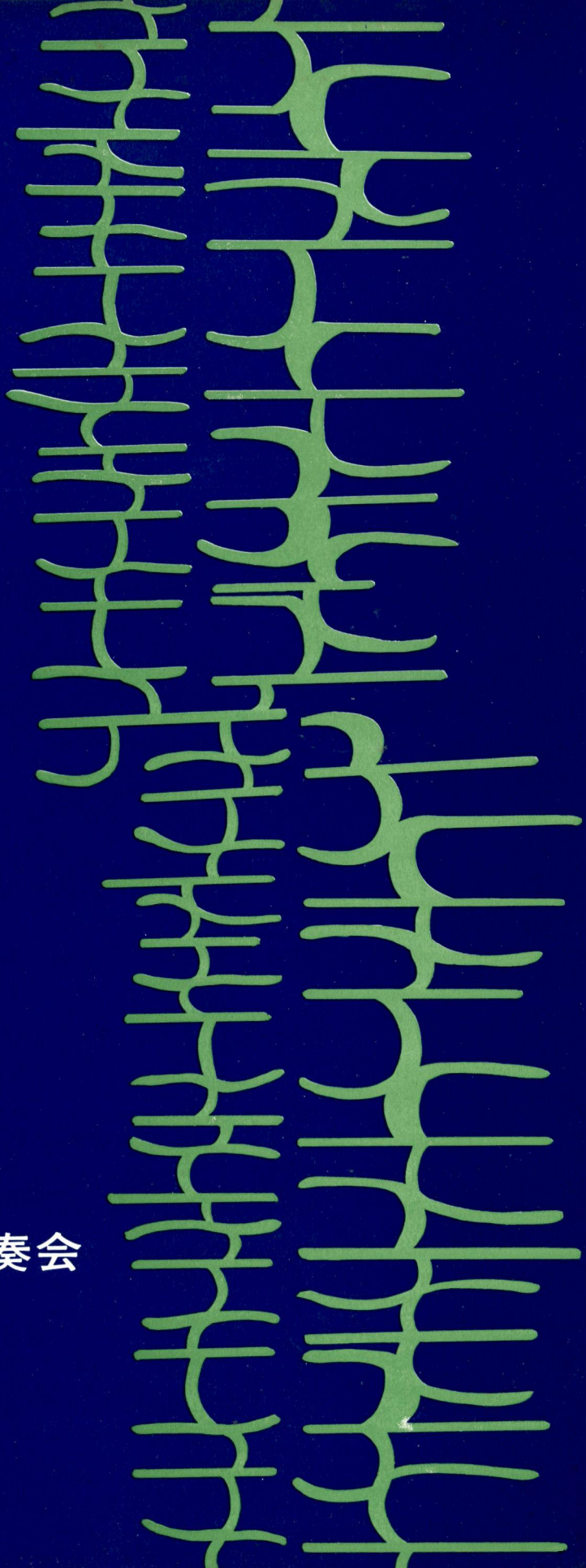
新響

訪ソ記念
新交響楽団特別演奏会



THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA

Memorial Concert

指　揮　芥川也寸志

Conductor　YASUSHI AKUTAGAWA

訪ソ記念新交響楽団特別演奏会

Ⅰ　**交響譚詩**……伊福部　昭
Ballata Sinfonica …… Akira Ifukube

Ⅱ　**組曲「道化師」より**……ドミトリー・カバレフスキー
Suite "The Comedians"…… Dmitri Kabalevzky

1　プロローグ
Prologue

2　道化師たちの駆け足
Comedians' Gallop

3　ガボット
Gavotte

4　エピローグ
Epilogue

Ⅲ　**弦楽のための三楽章**……芥川也寸志
Triptique for String Orchestra…… Yasushi Akutagawa

Ⅳ　**交響曲第5番　ホ短調　作品64**……ピョートル・チャイコフスキー
Symphony No.5 e-minor op.64……Piotr I. Tchaikovsky

1　アンダンテ――アレグロ・コン・アニマ
Andante――Allegro con anima

2　アンダンテ・カンタービル
Andante cantabile

3　ワルツ：アレグロ・モデラート
Waltz : Allegro moderato

4　フィナーレ：アンダンテ・マエストーゾ
Finale : Andante Maestoso

東京文化会館　1967年8月17日（木）7時

主　催　新交響楽協会
後　援　ソ連大使館
毎日新聞社
日ソ青年友情委員会

ПОСЛАНИЕ

Мне доставляет большое удовольствие приветствовать участников Нового симфонического оркестра в связи с предстоящими выступлениями оркестра в Советском Союзе.

Как известно, за последние годы в Японии побывали Государственный симфонический оркестр СССР, Ленинградский государственный симфонический оркестр, оркестр Московской Филармонии и другие коллективы и музыканты. Советские люди, в свою очередь, познакомились с искусством многих японских исполнителей.

Предстоящая поездка Нового симфонического оркестра в СССР является первой поездкой симфонического оркестра из Японии в Советский Союз и мы надеемся, что ваше искусство по достоинству будет оценено советскими любителями симфонической музыки.

Разрешите пожелать вам больших творческих успехов.

Н. Соловьев

Н.Соловьев.

22 июля 1967 года.

メ ッ セ ー ジ

今回の新交響楽団のソ連公演にあたり，皆様をお迎えすることを心から喜んでおります。

御承知のように，これまでに，ソヴエト国立交響楽団，レニングラード・フィルハーモニー交響楽団，モスクワ・フィルハーモニー交響楽団などの音楽家や団体が来日しております。そして日本の多くの演奏家と親しく接しました。

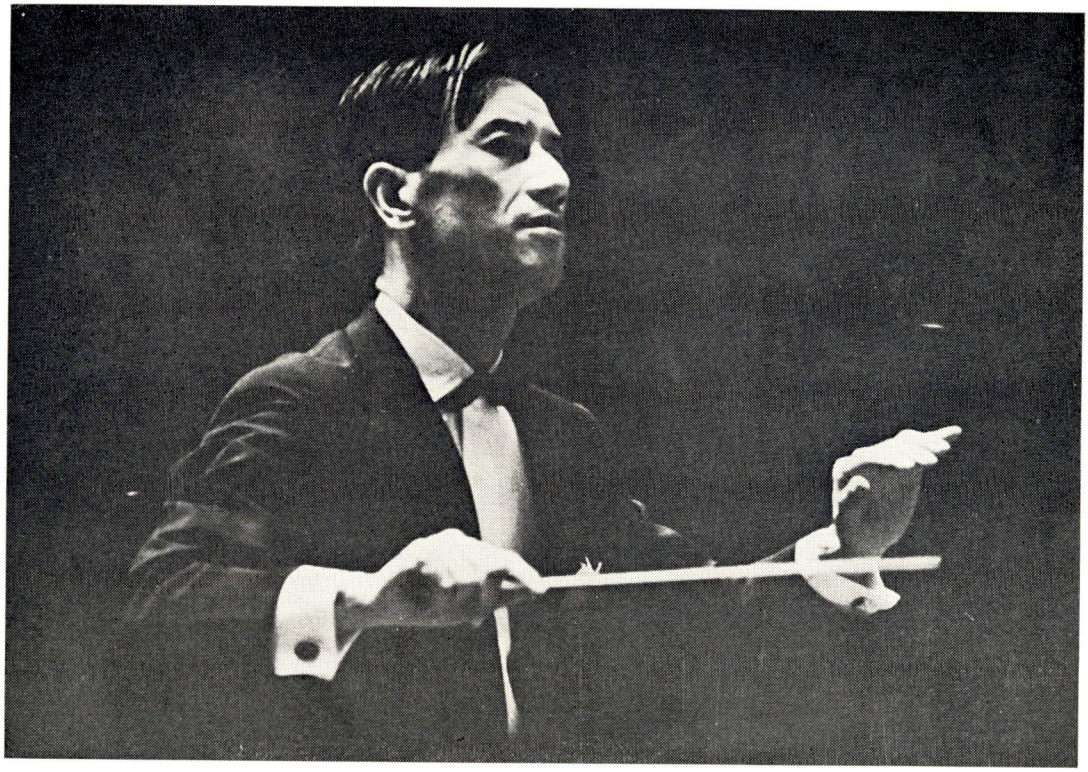
新交響楽団の今回のソ連演奏旅行は日本のアマチュア・オーケストラとしては，初めてのことであり，皆様の演奏がソ連の音楽愛好者から高く評価されるだろうと期待しております。

最後に，皆様の公演が大いなる成功をおさめられることを希望します。

在日ソ連大使館文化部長

N・ソロヴィヨフ

１９６７年７月22日



夢のあとに

芥川也寸志

新響を始めて11年，いろいろな夢をみてきました。
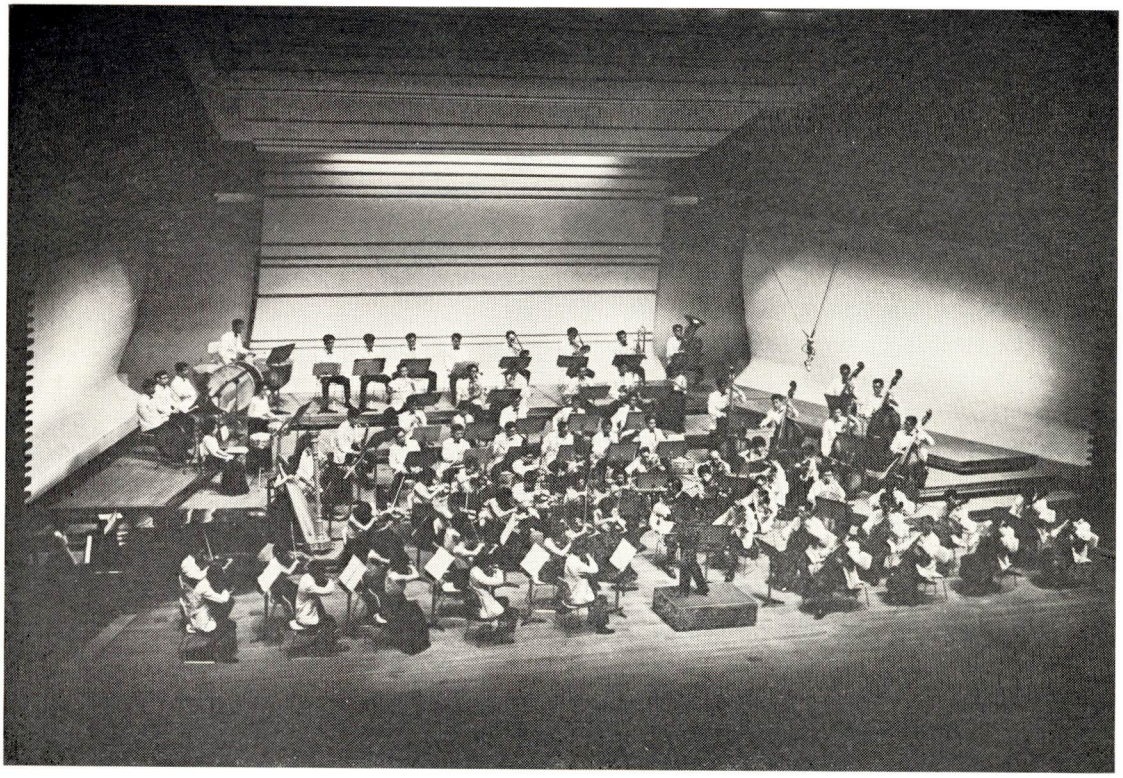
その夢の一つ，海外演奏が実現します。

総じて夢というものは，実は自分勝手な想像の産物に過ぎませんから，自分にとって都合の悪いところは全部割愛してあり，だからこそ楽しくもあるのですが，何かのはずみで都合の悪い条件が少しづつでもなくなり，夢でしかなかったものが実現の可能性を持ち始めるに従って，その楽しさもまた夜明けの霧のように，次第に薄らいでいってしまいます。

光がさしこみ，今まで眼にとめる必要のなかったものがみんなはっきりと見えてくるにしたがって，夢見心地の楽しさは，鋭い牙にとり囲まれた現実世界との斗いに変貌していくのです。<夢やぶれ>というのは，文字通りその斗いにやぶれ果てたものへの言葉なのでしょう。

日ソ青年友情委員会が，新響の演奏旅行を全ソ青年団体委員会に対して提案したのは，2年以上も前のことであり，モスクワで直接文化大臣にお会いして，この計画の実現をお願いしたのは，雪の降りしきる1965年の12月でした。当時は私にとっても，団員諸君にとっても，それは一つの夢でしかなかったのです。

旅券の申請も終った今にして想えば，夢というものがいつもそうであるように，随分長い道程を歩いてきたような気をしますし，一瞬のうちに過り過ぎたような気も



します。

時間の流れに従って，何度か夢のやぶれかかったことを想うと長くもあり，反対に今日から過去をふり返ると丁度望遠鏡をさかさにのぞいたように，小さく短かくも感じます。

しかし，とにかく夢を現実のものに変え得たのは，ささやかなりとも新響自身がいろいろな面で成長してきたからだと思います。今の新響が，もしも2年前と同じ姿であったとしたら，到底それはかなわぬ望みであったでしょう。

一つの夢は，また別な夢を呼びおこします。苦楽を共にしながら，勤務の都合や名という制限のために，今度の旅行に加われない人たちがいるということが，是非とも全員で行けるようになりたいという夢を抱かせます。もっともっと，いいオーケストラになっていい演奏を聞いて貰いたいという夢，もっと大きなオーケストラになりたいという夢，もっとたくさんのレパートリーを持つという夢，毎月定期演奏会を持てるという夢，いつでも素晴らしい客演指揮者を迎えられるという夢，アマチュアの団体と提携してオペラやバレェの公演ができるようになるという夢，あとからあとから，夢はふくらむばかりです。今，それらのたくさんの夢が，いつかは夢に終らないで，光のさしこむ時がくるように思えるのは，やはり海外演奏という一つの大きな夢が実現しようとしているからなのだと思います。

この機会をかりて，今度の演奏旅行を実現させるために力を与えて下さったすべての方々に，深く感謝の意を表明いたします。

特に，全ソ青年団体委員会前議長レシトフ氏，現議長ヤラボイ氏，全ソコムソモール第一書記パブロフ氏，ソビエト作曲家同盟書記長フレニコフ氏，日ソ青年友情委員会前理事長久保田氏，現理事長加藤氏，そして，前駐日ソビエト大使ウラジーミル・ビノグラードフ閣下，現大使オレグ・トロヤノフスキー閣下。

（新響訪ソ代表団々長・新交響楽団常任指揮者）

曲目解説

交響譚詩

伊福部　昭

この曲は1943年の夏，音楽を深く愛していた作曲者の兄の死を悼んで書かれたものです。同年の９月に行なわれた，ビクター管弦楽曲コンテストに応募し第一位に入賞，また初演は同年11月20日，日比谷公会堂において，山田和雄指揮の東京交響楽団によって行なわれました。以来，我国において，邦人作品の中でも比較的親しみやすい作品として広く知られています。

曲は次の二つの楽章から出来ていますが，戦争が次第に烈しくなり，大きな編成をとることが困難な時代に作曲されたので，オーケストラの編成は２管編成という比較的小さいものとなっています。

第１譚詩：律動的な楽想が全楽器の合奏で始められ，やがてオーボエの独奏によって第２主題が奏され，次第に展開して行きます。ソナタ形式の楽章。

第２譚詩：ゆるやかなオーボエの独奏で始まり，引続いてクラリネットに引継がれますが，弱いリズムを伴ないながら旋律は次第に変奏されて行きます。中間部を経て再びもとの主題に帰り，静かに曲を終ります。

＜作曲者の略歴＞

1914年釧路に生まれ，少年時代を北海道中部の高原シャアンルルに送りました。彼にとって最初の音楽は，この地に集まる各地方からの移住者達の民謡とアイヌの土俗音楽でした。はじめ林学を志し，北海道帝国大学に学び，林務官として遠い僻地での生活を続けました。この間に，最初の管弦楽作品「日本狂詩曲」がパリでチェレプニン賞に入賞し，これが機縁となって，アレキサンダー・チェレプニンが来日した時，彼についてはじめて正規に近代管弦楽法と作曲法を学んだのでした。終戦と同時に林業の職を離れ，1946年東京芸術大学に管弦楽法を講じましたが1953年これを辞し，現在は作曲家として活躍しています。主要作品としては「交響譚詩」の他，「日本狂詩曲」，「土俗的三連画」，「ヴァイオリンと管弦楽のためのラプソディ」，「タプカーラ交響曲」，「合唱曲“オホーツク海”」その他，ピアノ曲や歌曲などがあります。

組曲「道化師」より

ドミトリー・カバレフスキー

作曲者ドミトリー・カバレフスキーは1904年生れ，現在もソビエトで活躍している純粋な20世紀人，したがってこの曲はまぎれもない現代音楽。という訳ですが，プロローグの始めの第１音から，朗らかな楽しい曲であることがわかります。

1938年，モスクワの中央児童劇場で上演された芝居「発明家と道化師」の伴奏音楽から10曲を選んで作られたのがこの組曲ですが，今日演奏されるのはそのうち，第１曲の「プロローグ」，第２曲の「道化師のガロップ」，第８曲の「ガヴオット」それに第10曲の「エピローグ」です。

録音ニュースの時間を終ります。　　NHK。

弦楽のための三楽章

芥川也寸志

＜トリプティーク＞は，1953年，オーストリアの指揮者クルト・ウェスの依頼により作曲されたもので，＜トリプティーク＞とは三連画という意味であります。

初演は同年12月，カーネギー・ホールで，クルト・ウエスの指揮，ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団によって行なわれました。また1955年にはニコライ・アノーソフ指揮の全ソ放送交響楽団によりモスクワにおいて演奏され，楽譜は1956年 State Music Publishers Moscow より出版されました。その後ベルリンやウィーンなど世界の主要都市で度々演奏されています。

曲は歯切れのよい小刻みのリズムの第１楽章，旋律が美しく歌われる「子守唄」の中にノック・ザ・ボディの日本的なリズムが効果的な第２楽章，日本の祭り太鼓のリズムを使った第３楽章の三楽章より成っています。

＜作曲者の略歴＞

1925年東京生れ。1947年東京音楽学校本科作曲学部を卒業し，２年後同研究科を修了しました。同校在学中は師の伊福部昭氏より多大の影響を受けましたが，1950年ＮＨＫ放送25周年記念管弦楽懸賞に応募した「交響管弦楽のための音栄」が特賞として入選し，出世作となりました。1953年には団伊玖磨，黛敏郎とともに「三人の会」を結成し，管弦栄作品を多数発表しました。主な作品としては，「交響曲」，「嬉遊曲」，「エーロラ交響曲」，オペラ「黒い鏡」等があります。

交響曲第５番ホ短調　op.64

ピーター・イリッチ・チャイコフスキー

モデュト・チャイコフスキー様

ここ，ロシア西南のフロロクスコエの朝の景色がとても美しいので，体は疲れているが，朝の散歩を30分から２時間に伸ばそうと思っている。正直なところ，まだ創作しようとする衝動を感じていない。これはどういう事なのか。もう僕には書けなくなってしまったのか。楽想も出なければ創作する気も出ないのか。けれども，僕は実は交響曲のための材料を少しずつ集めたいと思っているのだ……親愛なる弟へ。　1886年５月27日ピーター

フォン・メック夫人へ

私は交響曲を一つ書くつもりだということを申しましたかしら。その出はじめはずいぶん苦労しましたが，やっと霊感が起こったような気がしてきたのです。私に他人にも自分にも，自分がまだ作曲家として種ぎれになっていないことを証明したしてたまらないのです。……

1886年６月ピーター

フォン・メック夫人へ

私は例の交響曲の管弦楽法を，半分だけ終りました。私はそれほど年をとったわけでもないのに最近年齢を感じはじめました。このごろはたいへん疲れるので，以前のように夜になってピアノを弾いたり本を読んだりすることがもうできなくなってしまったのです。……私が年寄りになって，いよいよ作曲をやめなければならなくなったら，花でも作って毎日を過ごそうなどと考えております。……

1886年８月６日　ピーター

フォン・メック夫人へ

私は健康がすぐれませんが，ついに私の第５番目の交響曲を完成しましたので，体の具合の悪さを忘れるほどうれしい気持でいっぱいです。……

1886年８月26日　ピーター

こうしてチャイコフスキー48歳の時に完成したこのホ短調の交響曲は，第１楽章のはじめに２本のクラリネットで奏される「運命の主題」を中心に，情緒豊かに，また劇的に組み立てられています。第３楽章にワルツが使われている交響曲は，ほとんど例がありませんが，その他の楽章もきわめて美しい旋律にあふれているため，全楽章にそれぞれ，「行動」，「情熱」，「浮草」および「戦争」というタイトルがつけられて舞踊家レオンド・マッシーヌによってふりつけられた事もありました。

この曲は演奏史上においても数々の劇的な名演奏を残しているといわれます。だいぶ前ですが，最近日本にも来た，レオポルド・スコフスキーの振ったこの曲の第２章が，カーネギー・ホールの天井さじきの一角からゆっくりゆっくりカメラをパン・ダウンしながらついにあの白髪を振り乱すストコフスキーの特有の指揮ぶりがアップになるまで，映画，「カーネギー・ホール」の中で紹介されました。またこれももう数年前の事ですが，ＮＨＫ交響楽団の質を飛躍的に高めたといわれる，シュヒターが，任期を終えて日本を去る時のお別れ演奏会でこの曲を振り，自分の育てたオーケストラを，文字通りゆさぶりながら感激的な演奏を聞かせてくれた時の印象も，筆者にとって忘れがたいものとなっています。

（仙名　保）

連載≪戦後日本オケーストラ小史≫　II

馬　場　　健

■終戦直後のオーケストラの復興

昭和20年８月15日，満４年にわたった太平洋戦争，満州事変から数えれば，実に14年間にも及んだ戦争が終りを告げた時，多くの人びとは，久しぶりに訪れた平和に安堵すると同時に，ほとんど徹底的に破壊されてしまった国土に気づき，初めて体験する他国による占領という事態を目の前にして，暗胆とした気持を抱いていた。少なくとも，首都東京をはじめとして，大都市の多くは，立ち直り不能とも思えるほどの壊滅状態にあった。そうしたなかにあって，日本交響楽団が，終戦の日から，僅か１カ月後に，はやくも定期演奏会を開始したのは，驚嘆すべき事実である。日響第268回定期公演は，９日14 15両日，焼けのこった日比谷公会堂で，尾高尚忠指揮，佐々木成子独唱で行なわれた。曲目は，

R・ワーグナー：≪マティルデ・ヴェーゼンドンクの５つの詩≫

伊福部昭：≪土俗的三連画≫

ベートーヴェン：交響曲第３番変ホ長調≪英雄≫

であった。結局，日響は，戦中，戦後の混乱のさなかにも，内閣情報局の勧告によって，昭和20年４月の定期公演を一度休んだだけで，活動を続けたことになる。９月の定期公演も，すでに予告されたものだったとはいえ，そして，いかに日本放送協会という強力な後だてがあったとはいえ，８月15日を境に，全く一変してしまった状況のなかで，それを実現するのは，容易なことではなかっただろう。

10月の定期公演には，昭和19年春以来，指揮台から去っていたローゼンストックが復帰，井上園子の独奏で，チャイコフスキーのピアノ協奏曲第１番，ドヴ☆ルザークの交響曲第９番≪新世界より≫などを指揮，11月定期にはレオ・シロタ，12月定期にはウィリー・フライが独奏者として登場して，楽壇に返り咲いた。

こうした面からみれば，終戦直後の日響の活動は，いにも順調のようにみえるが，内幕は必ずしも楽ではなかった。会場の日比谷公会堂は，他の多くの施設と同様に駐留軍に接収され，日本人が使えるのは昼間に限られていたので，定期公演は，午後３時，もしくは３時半の開演であった。その上，しばしば駐留軍向けの演奏会を開かねばならなかったし，各地の駐留軍施設に出張演奏もしなければならなかった。楽員の多くは，生活のために小さなグループを作って，駐留軍施設にアルバイトに出かけていた。それでも，まだ日響は恵まれたほうであった。

太平洋戦争の末期に，活動を停止してしまったその他のオーケストラにも，再建の動きが活発になってきたがそれは困難をきわめた。

昭和20年９月，旧海軍軍楽隊の復員者たちを中心に，東京都の後援のもとに，≪東京都音楽団≫が発足，９月29日には，内藤清吾指揮で，吹奏楽演奏会を開いた。翌昭和21年には，これに旧東京交響楽団（現在の東京交響楽団とは全く別の団体）のメンバーなどが加わって，山田耕筰を会長とする≪東京都フィルハーモニー管弦楽団≫となり，オーケストラ活動を始めた。けれども，その７年の月には，早くも東京都の出資が停止されて，１年足らずで解散してしまった。しかし，そのなかから，旧東響のメンバーが中心となって，駐留軍のためのオーケストラ≪アーニー・パイル・オーケストラ≫に加わって活動を続け，昭和23年４月からは，≪東京フィルハーモニー交響楽団≫または≪東京フィルハーモニー管弦楽団≫の名称のもとに活動した。

一方，戦前の≪ＰＣＬ管弦楽団≫以来，≪東宝映画管弦楽団≫，≪東宝音楽団≫と，専属のオーケストラに力をいれていた東宝株式会社も，昭和20年９月には，再び専属オーケストラの再編成を計画，10月にはオーケストラの編成に着手し，昭和21年１月，藤原歌劇団の≪椿姫≫公演に，≪東宝交響楽団≫として初出演した。４月に

は楽員の編成をほぼ完了して，５月14日，上田仁指揮で第１回演奏会を開いた。しかし，翌昭和22年には，東宝の方針が変更されて，東宝株式会社の直属から，音楽部門が切り離され，２月には，自主経営団体≪東宝音楽協会≫が設立されて，オーケストラの運営に当ることになった。東宝音楽協会は，その年の秋のシーズンからの定期公演を計画，常任指揮者には，戦時中，ヨーロッパやアメリカで活動し，ヴァイオリニスト，諏訪根自子を伴って帰国したばかりの近衛秀麿と上田仁を迎えた。第１回定期公演は，９月29日に予定されたが，当日は台風のため，楽員，聴衆ともに参加不可能のものが多く，結局，10月23日に延期されて，近衛秀麿指揮で行なわれた，以後，宝響は，近衛指揮による古典派・ロマン派を中心とするオーソドックスなプログラムによる公演を日劇で，上田仁による現代曲や日本人作品の初演・紹介を目的とする公演を日比谷公会堂で，２本建ての形で行なうようになった，近衛は，昭和22年から翌年にかけて，自らの手になる４管編成用のスコアによって，≪ベートーヴェン・チクルス≫を行なうなど，本領を発揮したし，上田は，昭和22年に，新憲法発布を記念する橋本国彦の≪祝典交響曲≫，長谷川良夫の交声曲≪大いなる朝≫を初演したのを手初めに，内外の作品を数多く初演して，特色を出した。

関西でも，昭和21年には，指揮者朝比奈隆を中心に，オーケストラの設立が計画され，何人かの関西財界人の資金援助を仰ぎ，大阪中央放送局（ＪＯＢＫ）のメンバーなどによって，≪関西交響楽団≫が結成された。しかし，これとても，完全に独立した団体とはいえなかった。ＢＫのメンバーは，ＢＫに所属したまま，≪関響≫力に参加していたし，≪関響≫自身も，練習場から，楽器・楽譜に至るまで，ＢＫから借り受けるという状態であった。それでも昭和22年４月には，第１回演奏会を開いた。

このように，昭和20年８月の終戦から，僅か２年ほど公共機関の援助を受けていないのである。

しかし，その≪日響≫にも，大きな悩みがあった。昭和21年９月の定期公演を最後に，≪日響≫が育ての親であり，頼みの綱ともしていたローゼンストックが，アメリカに去り，その後を，尾高尚忠，山田和男の２人が受けもった。ちょうど，≪日響≫の演奏活動が軌道に乱ってきたところだっただけに，この２人にがかる負担は，あまり重かった。以後５年にわたるこの重荷から，尾高は，昭和26年春，過労で倒れ，２月16日，出血性灰白質脳炎で死去した。２月15，16両日の定期公演の第２日，日比谷公会堂に張り出された尾高死去と，代演を高田信一がつとめる旨のお知らせの白い紙を，私はいまも忘れることができない。私が聴いた尾高最後の演奏は，前年10月定期，来日中のフランスのピアニスト，ラザール・レヴィヒのシューマンの協奏曲，チャイコフスキーの第４交響曲であった。評論家，野村光一は新聞に，＜尾高を殺したのはＮＨＫである＞と，激烈な口調で書いた。

この尾高の氏は，≪日響≫自身にも，また日本のオーケストラ界全体にも，ひとつの転機をもたらしたかのようにみえる。終戦直後の混乱のなかから，多くの人々の労苦と犠牲の上に再建され復興してきたオーケストラは，戦後５年を経た昭和25年から26年にかけて，やはり体質改善を必要としていたといえるだろう。その意味で日本のオーケストラ界の転機を，昭和26年に置くのは，妥当と思われる。

今日のオーケストラの繁栄は，こうした戦後第１期における先輩たちの並みなみならぬ努力と労苦と犠牲の上に築かれていることを，忘れてはなるまい。

（音楽評論家）

親善旅行を前にして

戸田昌広

皆様はすでにご存知のように，私たち新交響楽団はアマチュアの団体です。

各団員は音楽が好きだ，楽器を手にしているという点では共通しておりますが，一人一人の社会生活や職業，年令などは全く統一されておりません。

この社会の縮図のようにいろいろの人々が寄り集まっているグループには，学校や職場にはないよさがあり，音楽にはもちろんのこと，このような人間関係が団を支える力となっているのです。

新響は団員の音楽に対する情勢と，お互いの友情，そして創立以来，指導し育ててこられた芥川先生の熱意によって著実に成長し，現在90名以上の団員によって活動しております。昨年3月，東京労音より独立して，全く経済的バックを持たずに自主的に運営しておりますが，序々に軌道に乗りつつあります。

昨年は創立10周年を記念してベートーベンの全交響曲連続演奏会を行い，本年はソヴイエトの親善演奏旅行と大きな企画が続き，日頃のじみちな活動の成果が現われてきたものと喜こんでおります。

新響は毎週土曜日の夜，定期練習を行なっており月に一度は日曜日にも練習が持たれます。いくら好きとはいえレジャーブームの昨今に週末を年がら年中，オーケストラの練習に取られるのだすから，音楽生活には恵まれているとはいえ，つい熱中しすぎて他の面で出遅れている人もいるようです。練習場が上野にあるので，土曜日の夜など駅で山へ出かける人々を横目で見ながら，楽器を恋人と思って抱きかかえて練習にやってくる団員はちよっとやそっとの音楽愛好者ではありません。この好きな音楽によって外国へ行けるという全く夢のような話がこのたび実現されることになって皆はりきっております。

しかし外国へは行きたいが，仕事を持っている我々にとって会社を休むということが大問題です。新響は過去に一週間程の演奏旅行を，北海道と四国に行ったことがありますが今度のように半月以上の日程の旅行をするのは始めてであり，はたして皆が参加出来るかどうか心配でしたが，去年あたりから休暇を使わず旅行にそなえ，会社へもアッピールし，各自相当無理をして都合をつけましたが，中には会社から休みがもらえず参加出来ない団員もおります。

そもそもこのソ連への親善演奏旅行は，新交響楽団が独自の企画で行うものではなく，日本とソヴィエト青年間の交流団体である日ソ青年友情委員会と全ソ青年団体委員会との文化交流協定にもとずいて実現されるのです。両委員会は日ソ両国青年間の文化，芸術，スポーツなどあらゆる分野の交流をし，両国青年の親善と相互理解を深める為に活動しており，毎年いろいろな多くの代表団が行ったり来たりしております。

以上のような意義のもとに訪ソするのですから一般的な楽団の演奏旅行とは少し性格が異なります。ソ連の青年組織の招きによとて行くのですから演奏会も青年を対象として開かれ，一切無料のコンサートです。私がこの五月に日ソ青年友情委員会から青年芸術団の一員として派遣された折，モスクワで打合せをして参りましたが，その際，全ソ青年団体委員会の係員は，ソヴィエトへ外国からのアマチュアオーケストラの来演は今迄になく，新響が始めてであり大変関心を持っており今から楽しみにしていること，又お互いの友情を深める為に少しでも多くの人に聞いてもらえるようにと，すべての演奏会を全ソ青年団体委員会の責任において無料のコンサートにすることになりました。

ソ連はご存知のように音楽のみならず，芸術，文化活

訪ソ公演日程

9月22日	横浜港出発
24日	ナホトカ着，発
25日	ハバロフスク着，演奏会
26日	イルクーツク着
27日	演奏会
28日	モスクワ着
29日	演奏会
30日	モスクワ滞在
10月1日	演奏会
2日	モスクワ発
3日	レニングラード着，演奏会
4日	レニングラード発
5日	モスクワ着，発
6日	ハバロフスク着，発
7日	ナホトカ着，発
9日	横浜港帰着

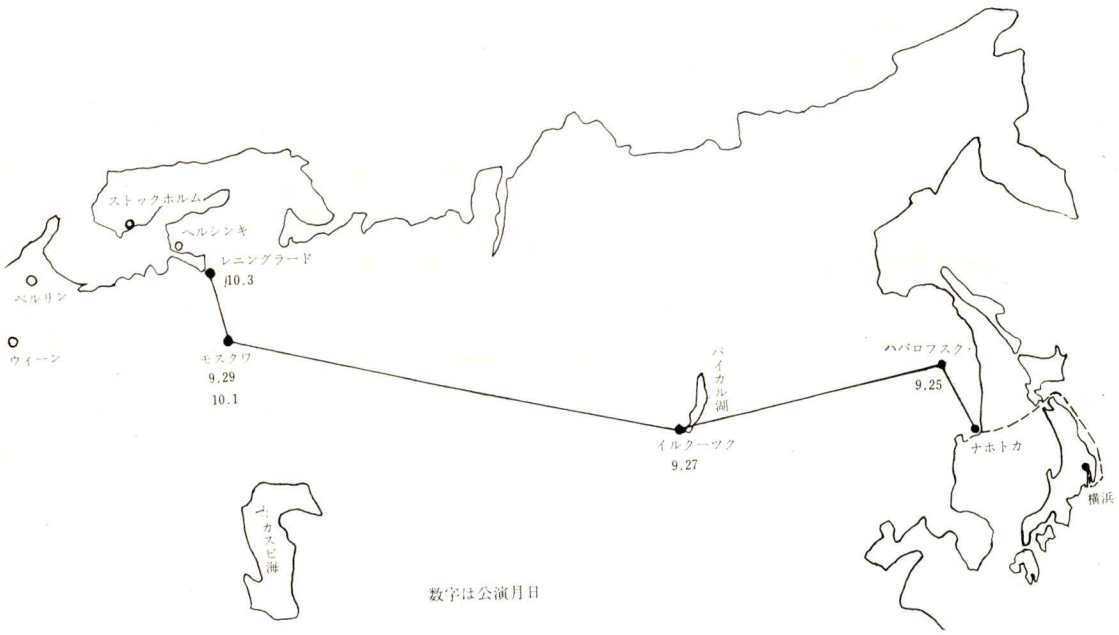
動などが大変盛んな国であります。専門の芸術家については日本へも公演に来ているので周知のとおりですが，アマチュアの芸術，文化などにおけるサークル活動はとても盛んであり日本とは比べものになりません。サークルで活動している会員は日本もソ連も同じで，それぞれの仕事を持ち，勤務のあと三々五々と集まって歌や踊りや楽器の練習をしたり発表会を持ったりしているのですから，新響と何ら変るところはありません。

ではどこが違うかというと，そのサークルをささえている基盤です。私たちは毎月300円の会費を集め運営に必要な一切の費用，楽譜，楽器，ユニホームと誰からの援助もなく自分たちがやりくりしながら活動しているわけですが，ソ連では全く逆で，活動に必要なすべてのもの練習場，楽器，楽譜，ユニホーム，発表会に必要な経費，指導員などは国家によって用意され，サークル員はただ活動に参加することだけで良いということ，いいかえればお金もなく楽器もなく，演奏することが出来なくても楽器を貸してくれ，教えてくれて自由にサークル活動に参加出来るというわけです。モスクワでアマチュア，コーラスの発表会があるというのである文化宮殿を訪れたのですが，コーラスの発表会の他に，民族舞踊，ジャズバンド，アコーディオンなどのサークル練習をしておりその人たちと話す機会を得，我々日本のサークル活動の実状を話したら驚いて，とても信じられないことだといっておりました。

日本とソ連は国家体制が違うのですから止むをえませんが，あまりにもその違いすぎにソ連の人々は恵まれているとつくづく感じましたが，新響などはそのハンデイを乗り越えて立派に活動しているのですから，これは多いに誇りにして良いことだと思います。このようなアマチュアのサークル活動が盛んで，その水準も高い国へ，日本からアマチュア・オーケストラが出かけて行くのですから，大きな関心を持たれるのは当然ですが，私達もソ連のアマチュア・オーケストラに負けないように立派な演奏し，音楽をとおして，友情を深め，交流も沢山してきたいと思りております。

日本から社会人のアマチュア・オーケストラが外国へ行くのは新響が始めてではありますが，これを機会に今後ますます専門家のみならず，アマチュア・オーケストラの国際交流が盛んになる為にも，私たちのソヴィエト親善演奏旅行が成功するよう頑張りたいと考えております。

（新交響楽団委員長）



新響の壮挙に乾杯する

向　坂　正　久

昨年の春に東京労音から独立した新交響楽団の前途を危ぶむものは多かったが，芥川也寸志氏を中心に見事な結束を保ち，秋には10周年記念のベートーヴェン連続演奏会を開いて，その存在感を堂々と示したのたであった。それから1年，こんどは全ソ連青年団体委員会の招きで約3週間の訪ソ公演をもつという。実は電話でマネジャー格の宍戸さんからその話を聞いた時には自分の耳を疑ぐったのだが，まさかアマチュアのオーケストラが海外公演をもつとは予想もしなかったからである。今までにも大学の管弦楽団が海を渡った話はいくつかあった。たとえば藤田由之氏指揮の青山学院大学がアメリカに，また早川正昭氏指揮の東京大学がヨーロッパにといった例は比較的近年のことだが，こうした場合も実現には関係者の大変な努力を必要としたではあろう。しかし大学の場合はその名称だけで信用があり，向うの大学が招待役を買って出てくれるし，経済的にもさまざまな形でバックアップされる面がある。もちろんＯＢもかなり加わったにしても主体が学生だから日程のやりくりもそう障害にはならないであろう。ところが新響の場合は芥川氏の信用度は大きいとしても何らかのバックがあるわけではなし，ほとんどのメンバーが他に職業をもっている人ばかりだから，まずそれらの人々が3週間の休暇をどうとり，またソ連国内は向うもちとしても往復の旅費は各自の負担ということになるだろうから，その捻出も大変であろうと推察する。それを乗りこえて76名で訪ソするというのだから，これは前例のない壮挙だといえる。

日本のオーケストラがソ連の都市で演奏するのは7年前のＮ響以来2度目のこととなるわけだが，プロの代表とアマの代表と向うの聴衆は分けて聴いてくれるとは限らない。東大のオーケストラもドイツ公演では批評の対象としてはプロ並みに扱われたそうだから，その点，あくまで日本のオーケストラとして最善をつくして演奏してきてほしいと思う。曲目もおそらく今夜の日ソ2曲づつのものが訪ソ公演の骨格となるのだろうが，チャイコフスキーの第5交響曲は向うの人の耳が肥えているだけに十分に練習を積んで，とりあげた意味をはっきりと聴衆に認識させてほしいものである。要は堅くならず，過去10年の汗の努力をできる限り十分に発揮するということにつきるが，そのためにも違った風土のために病人が出ないように祈らざるを得ない。

過去10年の歴史がこの訪ソ公演を機会に新しい頁を開くことになるが，芥川氏が常にいう「アマチュア最高のオーケストラ」という目標に大きく前進したことは間違いない。今夜は酒の飲めない私も，この愛する新響の壮挙を祝して，仲間たちとビールで乾盃したい気持である。

（音楽評論家）

随想「音楽と旅する人生」

斉　藤　好　司

ソビエトが外国からアマチュアのオケを招くのは初めてだという。日本から外国に演奏旅行にでるのも，社会人のオケとしてはもちろん初めてのケースであろう。

顧みるに日本人の手によってオーケストラの演奏活動がスタートしたのは約50年前のことである。わずか半世紀にして，今日，かくも巾広い音楽愛好者層と，勤労者の演奏活動などを考える時，いかに音楽が人々の生活の中にとけこんだものとなってきたかと感嘆させられる。

この度の「新響」の海外旅行は日本の音楽史の一頁を飾るにふさわしい意義を持っていよう。

50年前，早大，慶大，東大，などの学生オケの創設期の記事を読むとその苦節の跡がしのばれる。その後N響がプロとして演奏活動に入り，大正の中期には専門家の「玄人」と道楽の「素人」と区別されて音楽の演奏がなされてきた。

日本に移入された外来の文化の流れをみる時，オケより早く紹介された近代文学の歩みの中から，今日の音楽の方向を示唆されるものがある。明治初年に坪内や二葉亭により紹介された西欧の文学も，当初はその真意がそのまま受け入れられず，相変らずの戯作や空想美化，又は観念的道徳文学が巾をきかせていた。しかし近代リアリズムの本道をたどり初めた時文学は，美辞麗句を得意とする文章屋や，いわゆる詩人というような専門業の人達だけのものではなくなり，全ての人々の生活の中にとけ込んだものとなっていった。

石川啄木は「食うべき詩」という評論の中で，「詩は実人生にとって精神の栄養として必要なものだ。」「今までの詩は空想と幼稚な音楽と微弱な宗教や古い因襲的な感情があるばかりだ。もっと両足が地面についた実人生の感情を歌おう。」と。そして「詩人たる資格はつあり，1にも2にも3にも『普通の人』でなければならぬと述べている。翻って今日の音楽界を考えてみるに紆余曲折50年にして，この啄木の境地に至り着いたようだ。「詩」を「音楽」に置きなおしてみればこうなろう。「真の音楽マン」は，音楽の為に音楽を奏づる音楽屋を極力排して，自己を改善し，自己の哲学を実行しようとする政治家のような勇気と，自己の生活を立てんとする実業家のような熱心さと，常に科学者のような明敏な判断力，そして，未開地の素朴な人のような素直で，自己の気持の変化を偽らず飾らずに，極めて平気に正直に表現する人の音楽でなければならないということなのです。

つい最近まで音楽家やオケの奏者は燕尾服の紳士で特別なえらい人であるかのように思い込まれていたが，今日ではだいぶ様子が変って，「誰でも楽器を楽しめるし」，「自分の楽器でチャイコフスキーとも親しめる」，ようになってきたのです。昔のあの異常なまでに緊張した聴衆とステージ上の尊い方々との関係はすでに影を潜めて演奏者と聴衆との和やかな，静かな中にも心の通いあった雰囲気で結ばれるようになってきたのは嬉しいことです。

楽器を演奏できる人はずいぶん増えて来た。特に管楽器のアンサンブルでは99%までがアマチュアの演奏団体であるし，職場や一般のバンドは数多く編成され隆盛の一途にある。都内の毎年高校を卒業する奏者だけでも約1,000 名はいるのですから相当な楽器人口になったものです。少数の専門家だけのものであったオーケストラが多数のアマチュア自身のものとなり，その量質ともに拡大し向上し，優れた奏者があとからどしどし排出する時代こそ待ち望んでいたものです。そしてそれは一方，専門家への要求がさらに厳しく崇高なものへと変えさせる意味をも持ってくるのです。一流音大を出たから一流の奏者として社会に通用するとはかぎらないし，音楽の技術だけを勉強しても，それだけでは音楽表現の何かが欠ける場合がある。音楽の魅力はその人間の現われであるなら，当然人間性の問題に直面する。形や技術だけでなくその内容の魅力の追求は，文学，思想，哲学，法律，科学とあらゆる教養を身につけたり，生活体験からえられる人間関係などからにじみでる豊かな人間性の発露されたものでなければならないだろう。例えば「あの指揮者は不幸な事に音楽の技術しか身につけていない。」とか「彼の述べる理論だけは立派だが実際演奏すると何の感興もない。」などの言葉はその事をよく物語っている。

往々にしてプロとアマが論じられる時に，その形にばかりとらわれて，その音楽の中味の問題が軽く取り扱われてしまうのは的をはずれている。以前は「音楽にアマもプロも区別はない」などとよく言われたが，最近ではむしろ，音楽は全ての人のものであり，プロとはその生活の形態に於て厳然と区別されるものだと考える方が妥当でしょう。「プロ」にも困った型がある。自分は音楽に生活がかかっているんだから普通の奴と違う尊厳を示す「ポーズ演技型」。音をだす事を仕事と割り切る「音楽手段型」。などがあるが，又このポーズだけをまねて

プロ気どりしているアマはなお始末におえない。「アマ」の困った型は，どうせ下手なのは当然だと「自己満足型」我こそはアマ最高なりと天狗の「井の中の蛙型」。自分が吹けないのは指揮者のせいだとする「責任回避型」などがある。

しかしとりわけアマチュアオケにとって大切なのは指導者の正しい指導理念であろう。中にはプロ礼賛型で技術向上のみをとなえ，個人レッスンのみが上達の近みちとばかりあせって，音楽にとってもっと大切な物があるのを忘れているようなさけない人もいる。もちろん技術こそ重要なものであるが，それは手段であって目的ではない。生活人の音楽活動にとって練習の毎回に，何が大切な物が考えてみる必要がある。自分はプロの指導者でおまえたちはアマなのだからという態度の指導者は無益であるから排折されるべきである。

さてふりかえってみるに，人々が生産労働の機械のように扱われていた時には，音楽を受動的に享受するのみでしたが，人間的な生活方，人生の意味や生きる喜びを知り，相己の意識にめざめた時，自己主張，自己表現の方向に発展してくるのは当然です。会社員も営業マンも学生も教員も，社長も工員も，OLも奥さんも，仕事を終えたあとで，一つに融けあい音楽に情熱を傾け，実生活の中からわきあがる感情を楽器に託せる時のもてる事は幸せな事です。音楽の中に逃避するのではなく，そこから生き生きとした明日の活動のエネルギーをくみとり魂の洗濯ができるのならどんなにすばらしいことでしょう。生活の中に音楽の溶け込んだ人生がいかに人々を励まし勇気づけ慰さめてれる事でしょう。昼間はそれぞれ専門の業に携わる様々な人々が金銭と関係なく心の結びつきを基本にに構成されるオーケストラが日本中各地に成長するのはすばらししことです。

新響の海外旅行の成果は，「行ってそつなく演奏してきた」にあるのではなく，「アマチュアオーケストラとして今日までの長い過程と将来の展望」において意味があるのだと言えよう。　　（新交響楽協会・団友）

「きりぎりすのガーシュ」

松　橋　雍　子

ガーシュは失恋しました。彼に残されたのはた一つのヴァイオリンでした。彼は森の中をさまよい歩いていました。あたりはブルーの空気に包まれて，若葉もしっとりぬれいました。その時森の奥から華やかな力強い響きが聞えてきました。ガーシュは歩き始めました。音は段々大きくなります。突然，目の前に広々とした原っぱが見えてきました。ここでした。あの響きは。います。います。うさぎ，たぬき，かっこう，猿，それに象はファゴットを抱えています。皆，各々の楽器を持って夢中で演奏しています。曲はベートーベンの第五です。今までにこんなに新鮮な気持で第五を聞いたのは始めてでした。ガーシュの心の傷口に，ひしひしと押しよせてくるような響きでした。ガーシュは走り出しました。彼はいつの間にか，その響きの中でバイオリンを手にしていました。太鼓のズンズン，ラッパの朗々とした響き，その間を漂うバイオリンのやさしい流れ，ppp p mf f ff <fff，ガーシュはもう自分の事も，まわりの存在も忘れていました。これこそガーシュの新しい「運命」でした。音はやみました。快い興奮に包まれながら，皆は木かぶに腰をおろし，ひと息つついています。ガーシュは正式の団員にしてもらいました。「森の楽団」という名でした。さっき，友達になったばかりのうさぎのピヨーンに色々聞いています。彼女は森の大学生でした。団員の中には，学校にも何年も居ついている学生専門家や，ベビーちゃんのいるママ，銀行マン，セールスマン，公務員，デザイナー，建築家の卵，科学者の卵，皆，昼間は，平凡な社会人？（動物？）なのだそうです。中央のひときは高いきり株の上に腰をかけているのは毛並の美しい銀ぎつねでした。彼の名は，コン・ダクトール。彼の体内から発される情熱と，遠い国で学んで得た広い，音楽への知識と深い造詩に対し，この森の女王から「コン」の称号を与えられ，コン・ダトールと呼ばれているのです。彼のまなざしは鋭く，ちがう音を出した時，そのキラリとした光にあうと，心の奥まで射ぬかれるような気がした。杉の梢にまん丸の月が登る頃，練習は終りました。ガーシュはその腹の月の美しさをいつまでも忘れられませんでした。

やがて，ガーシュにとって一つの試練がやってきまし

た。それは森の音楽祭での失敗でした。彼にとっては初舞台，ライトはまぶしく，自分の音ばかりが聞こえるようで恐しくなって，fを出す事もできず，終楽章などは息が苦しくやっとの思いでコーダをひき終ったのです。指揮台をおりたコン・ダクトールの後姿も何か寂しげで，ガーシュは申しわけなさで真赤になって下を向いていました。次の練習日，皆で真剣に反省しました。一人一人の練習不足，熱意の不足，痛烈な批評をしあいました。意識向上，練習強化，それが結論でした。レコード聞いて，ストバイ，セコバイのパート練習もふえました。何週間か，練習を続け，コン・ダクトールの目の中にもやさしい光がさし，注意する言葉にもユーモアがあふれてきた時，更に勇気づけられる事が起りました。それはイーカリ国からの招待演奏でした。イーカリ国は，この森からずっと遠く，海を渡った広い国です。昔は，この森の王様と戦った事もあり，両国の政策上のちがいから，しばらく国交もとだえたりしたのですが，音楽の世界に国境はありません。音符は世界の共通語なのですから。

団員は皆はりきりました。森の代表者として恥かしくない演奏をしようと。練習は増々，きびしくなりました。ガーシュはとても幸せでした。彼はこういう鍛練が好きでした。なぜなら，真の幸福は常に現在より上の方にあって，そこまで登る為には，必ず息をきらすようなつらい道がある事を確信していたからです。より高く登る為には，まだまだ苦しさが足りないようにさえ思えるのでした。

ガーシュには今少し心配がありました。それは，技術向上をめざすばかりに熱中し，楽団本来の存在意義を忘れてしまいそうになる事でした。隣の人がちがう音を出している時冷ややかな目つきでちら，と見る様な事もあるのです。森の広場で楽器を持っている時は団員の一人一人が師であり生徒にもなるのだから，もっと素直に注意しあい，直していけたら良いのに，と感じているようでした。

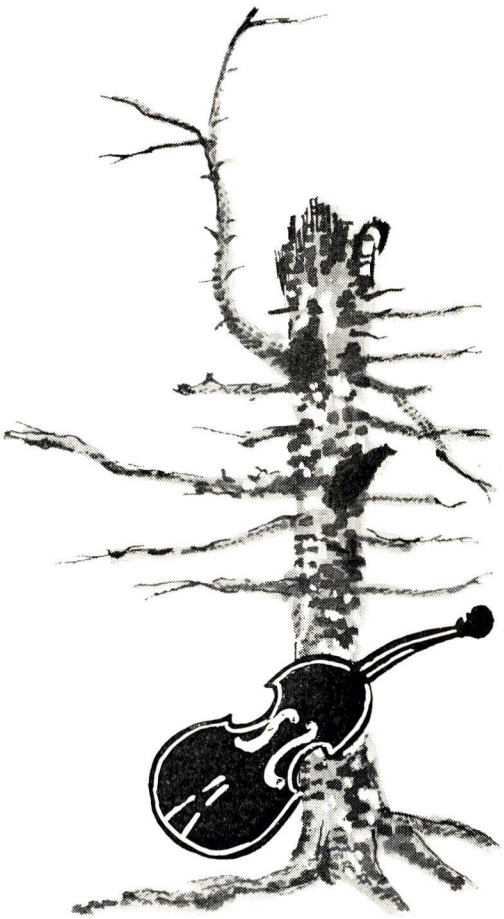
イーカリ国への出発の日は，次第に近くなってきます。朝早くから夜までの練習もあって，夜中もっぱら活躍のふくろうのネラリーなどは，目をこすりこすりオーボエをふいています。チェロのグワールは，目をらんらんとしてひいています。

ガーシュは，まだ見ぬ国での演奏への期待と，ちょっぴり不安とで心をときめかせています。そして，森のはずれの，きのこの下で目をとじながら，こうお祈りしました。

「神様どうか，今のこの仲間達が，これからぶつかる，どんな困難にも一つになって立ち向い，一つの大きな流れとなって滔々と，流れて行く事ができますように――」

杉の梢の，お月様は清らかに輝いています。気のせいか，ニッコリ微笑んでいるようにさえ思えるのでした。

（団員）



パートから（その6）

ファゴットの巻

客席からみてクラリネットの右にエントツみたいな筒が頭を出しているのが見えます。これがファゴットです。ファゴットという発音はドイツ語で，英語でバスーン，鼻にかけて甘くバッソン（フランス語）といろいろ呼名があります。

ファゴットは全長2.6m，高さ1.4mぐらいが標準で，材質はカエデ科のいたやもみじが多く，これはヘッケルシステムで，紫檀や黒檀類で作られるクランポンシスラムとがあります。前者をドイツ式，後者をフランス式といい，両者のちがう点は重に運指に関してすが，中でも高音域の運指にはからりちがう点があります。フランス式の楽器はかいして音が薄くかん高いひびきがし，鼻にかかった音色で，高音域中音域低音域の間に音質の差がめだちます。これに対してドイツ式の楽器は響きがあり，丸い音色がえられ，多くのファゴット奏者はこのドイツ式を使っています。

ファゴットを吹く人口は他の楽器に比べて非常に少なく，そのためのこの楽器の構造などを知っている人が多くいないのが残念です。そこでもう少しくわしく構造について述べてみます。ファゴットは5つの部分から成っています。リードをさしこむ金属製のクルーク，ウィング(テナージョイント)，ダブルジョイント(ブーツ)，ロングジョイント(バス)，ベルです。クルークには種々の長さのものがあり，これを変えることによってピッチを調整するのです。ファットの親分格として，1オターブ低い音が出せるコントラファゴットがあります。全長約6m，高さ約1.6mで床の上において吹きます。

ファゴットという発音はドイツ語ですが，この発音で英語の辞書をひきますと「マキザッポ」という意味があります。全く薪を4本集めてひっくり，リードという発音体をつけてむりやりに音を出させるような楽器で，他の木管楽器で，他の木管楽器を吹く人に言わせると，デリケートな所がなく軽蔑されているようです。はたして，この楽器は他と比べて非常に音程が悪るく，きちんと音程のとれたものは世界中さがしてもないといわれています。このようなマキを吹くやつはどんなにズボラな人間が吹いているのだろうと思われるでしょう。さにあらず，このようなデクノボウを他の優秀な楽器と対等にたちうちさせるには，人並以上の繊細さが要求されるのです。この点，私は落第のようです。

さて楽器がそろってもリードがなければ音は出ません。金管楽器のマウピースに相当するものですが，マウスピースは自分の口にあう既成のものを買ってくればれそれで良いのですが，木管楽器特にオーボエとファゴットの場合は，素材を購入して自分で細工しなければならないのです。これがなんといっても一番大変な仕事です。作ったものがかならず使用できるものとはかぎりません。数本作ってやっと一本良いのが出来るのです。せっかく良いのが出来ても寿命が短かく，2，3ケ月でだめになります。とにかくファゴット吹く（それにオーボエ吹き）はこのリードに一番なかされるのです。リードの材料は南フランス地方特産のアシで，その一節を四つ割りにして(ここまでのものが市販されています)これを鉄やすり，紙やすり，ナイフ木賊等で細工をします。最先端の一部を紙のように薄くし，どんな細かい振動でも楽器の円錘管につたわるようにします。

これまで楽器紹介みたいになってしまいましたが，ファゴットほど苦労の多い割には，オーケストラの中では非常に地味にあっかわれています。オケの低音域を受持ち，派手なところがなく，合奏の楽しみを充分味わうことの出来る楽器です。

ファゴット協奏曲としては70〜80曲（出版されているもの）ありますが，特に有名なものは，モーツァルト，ウエーバー，ヴィバルディーあたりでしょう。また独奏曲も名の知れたものは数えるほどで，ファゴットという楽器の特殊性がうかがえられます。

最後にファゴットの低音色と，高音域の甘い音色を十分に取入れているオーケストラ曲の例を上げてみました。

1. チャイコスキー：交響曲第6番悲愴のトップの旋律
2. リムスキーコルサコフ：交響組曲シエラザードの独奏旋律
3. ストラビンスキー：春の祭典のトップ旋律
4. ラベル：マメルロアのコントラファゴットの美女と野獣の旋律
5. プロコフィエフ：ピーターと狼のおじいさんの旋律
6. デュカ：魔法使いの弟子の三本のファゴットとコントラファゴットによる主題旋律
7. ドニゼッティ：愛の妙薬の人知れぬ涙のトップ旋律

（市川雅英）

この豪華なレコード全集が
この値段でお届けできるのは…

世界の出版社タイム ライフとドイツ・グラモフォンがしっかり手を結んだからです。



●世界中のご家庭にすばらしい音楽の花束を

この願いから生まれたホーム・クラシック・コレクション。カナダ、オーストラリア、ヨーロッパ各国はもちろん、日本でも大評判です。カラヤン、ベーム、マゼール、クーベリックなど一流アーチストの演奏。録音は定評あるドイツ・グラモフォン。30センチステレオLP盤、ケース、解説書…すべてが世界のタイム ライフにふさわしい、デラックスなレコード全集です。あなたのご家庭に音楽の豊かな果実を！

●いまご注文の方にはアンコール盤をプレゼント

タイム ライフが独自に開拓した、ムダのない直接販売が破格の特価を可能にしました。レコードを楽しみながらのお支払いは、月づきLP1枚分の分割払い。しかも、いまお申し込みいただいた方には、アンコール盤(30cmステレオLP)を無料で進呈いたします。ぜひ、この機会をご利用ください。



Deutsche Grammophon Gesellschaft

タイム/ライフ

東京・中央・銀座西6の3 朝日ビル

ホーム・クラシック・コレクション
(豪華カートンボックス入り)**好評発売中**

No.1 **小品珠玉集** 30cmステレオLP10枚組み
特価9,950円(1,990円×5回払い)
アンコール盤《新世界より》F.フリッチャイ指揮ベルリン・フィルハーモニー

No.2 **交響曲全集** 30cmステレオLP10枚組み
特価11,700円(1,950円×6回払い)
アンコール盤《トランペット協奏曲》
A.シェルバウム(tp.)演奏

今秋発売

No.3 **協奏曲全集** 30cmステレオLP9枚組み
特価9,950円(1,990円×5回払い)
アンコール盤《ショパン・ピアノ選集》

★カタログ請求、詳しいお問い合わせは—
港区東新橋2丁目2の9 越田商工ビル内
タイム ライフ・レコード係
TEL(436)0511

☆ご注意＝タイム ライフのレコード全集は、一般に市販されていません。ご注文は、ご面倒でもはさみこみの専用ハガキをご利用ください。